

参考文献リスト(3-4 気候変動による能登大納言小豆の生育への影響調査)

No.	著者(公表年)、文献名、学術誌名、巻(号)、ページ	概要	URL
1	國府尚夫, 道上吉憲, 黒田晃, 2010, 能登大納言「能系1」の育成とその特性, 石川県農業総合研究センター研究報告, (29) p.1~5	統一した系統がなかった能登大納言の中で、優良系統である「能系1」を選抜し、その特徴及び適した播種時期等について整理した。	https://www.pref.ishikawa.lg.jp/noken/noushi/kenkyu_houkoku/29/documents/h22-1.pdf
2	松谷瑛, 河原正明, 磯辺美里, 2018, 能登大納言の早播摘芯栽培, 日本作物学会講演会要旨集, p.60	石川県奥能登地域で栽培される能登大納言について、長雨による収量や品質への影響を低減するため、早播(6月下旬)及び8月剪葉の栽培方法(摘心)について検討した。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcsproc/245/0/245_60/_article/-char/ja/
3	小森二葉, 大橋善之, 大門弘幸, 2010, 湛水処理が水田土壌で栽培した大納言アズキの生育初期における不定根形成に及ぼす影響, 根の研究, 19 (2), p.43-48	京都大納言と能登大納言について、出芽直後の湛水条件に対する根部の応答を調査した。湛水を実施した場合と畑のみで栽培した場合とで比較したところ、能登大納言は京都大納言より乾物重の違いが小さかった。	-
4	農林総合研究センター, 2013, 能登大納言の晩播における無培土狭畦密植栽培, 石川県農林水産研究成果集報, 15	能登大納言小豆は、着莢が夏季の高温で減少することが知られている。ここでは高温対策技術として、晩播での無培土狭畦密植栽培の効果を検証した。	https://www.pref.ishikawa.lg.jp/nousei/kenkyu/seikasyuuhou/documents/nou1_4.pdf
5	小林大樹, 竹村美保, 小牧正子, 2010, 能登大納言と丹波在来小豆とのDNAによる判別, 石川県農業総合研究センター研究報告, 29, p. 27-30	県で育成したオリジナル品種を保つため、DNA解析により能登大納言と丹波地方の在来大粒小豆と区別する技術を検討した。	https://www.pref.ishikawa.lg.jp/nousei/kenkyu/seikasyuuhou/documents/nou23-2-1.pdf
6	牛尾昭浩, 来田康男, 磯野幸浩, 藤田賢次, 松本 功, 2013, 丹波大納言小豆の狭条密播栽培における生育特性, 兵庫農技総セ研報(農業), 61, p. 33-35	大豆の省力機械化栽培である狭条密播方法を小豆に導入した場合の生育特性を把握するため、播種日を3通り設定し検討した。播種期の分散により天候不順へのリスク分散が図れることが示された。	http://hyogo-nourinsuisangc.jp/3-k_seika/kenpo/khn61pdf/33-35.pdf
7	来田康男, 牛尾昭浩, 芦田龍太郎, 片岡茂里, 藤本周作, 竹村雅彦, 2013, 栽培方法を異にした丹波大納言小豆の収量・品質に及ぼす播種時期の影響, 作物研究, 58, p.33-37	丹波大納言小豆における播種期を早めた場合の影響について、慣行栽培と狭条密播栽培で検討した。狭条密播栽培では、慣行栽培と比較し、早播での減収程度が小さく抑えられていた。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcr/58/0/58_KJ00008840176/_article/-char/ja
8	小森二葉, 大橋善之, 大門弘幸, 2010, 剪葉処理が水田転換畑で栽培したアズキの生育と収量に及ぼす影響, 日本作物学会講演会要旨集, p. 122	水田転換畑における京都大納言の早播及び剪葉による子実重量及び収量構成要素への影響について検討した。特に剪葉後の葉面積指数の変化と収量構成要素に着目し、影響について確認した。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcsproc/229/0/229_0_122/_article/-char/ja/
9	沼田聡, 作山一夫, 小綿寿志, 神山芳典, 1991, 小豆「ベニダイナゴン」における播種期と種皮色の関係, 34, p. 11-12	岩手県のベニダイナゴンの種皮色の明るさや鮮やかさについて、気温や日射量と負の相関が指摘されている。晩播により生じる子実種皮色の変化について、気象条件との関係を検討した。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/tjcs/34/0/34_KJ00001690133/_article/-char/ja
10	高橋智宏, 作山一夫, 1998, 岩手県南部における小豆の作期と生育, 東北農業研究, 51, p.89-90	1997年に岩手県の岩手大納言において慣行栽培より遅い6月中下旬の播種で実験を行った。既往研究及び実験結果を用いて、小豆の生育や品質と気象条件について検討した。	http://www.naro.affrc.go.jp/org/tarc/to-noken/DB/DATA/051/051-089.pdf

11	佐藤久泰, 松川勲, 成河智明, 後木利三, 1975, 小豆新品種「アカネダイナゴン」の育成について, 北海道立農業試験場集報, 33, p. 47-57	1960年に育成が開始され、1974年に北海道の奨励品種に選定されたアカネダイナゴンについて、その特徴を示した。栽培適地の他、施肥量など栽培に関する情報についてもまとめられている。	https://www.hro.or.jp/list/agricultural/center/kankoubutsu/syuhou/33/33-6.pdf
12	澤田富雄, 池田高明, 2015, 美方郡における特産アズキ「美方大納言」の播種適期と亜リン酸施用による安定生産技術, 兵庫農技総セ研報, 63, p. 8-13	美方大納言の播種時期及び栽培管理法について検討した。この結果美方地域での播種適期は、7月20～30日頃であること、晩播では播種の密度の増加が減収抑制に繋がることが示されている。	http://hyogo-nourinsuisangc.jp/3-k_seika/kenpo/khn63pdf/8-13.pdf
13	田崎順郎, 1959, 小豆花粉発芽に及ぼすフェーンの影響について, 農業気象, 14 (3), p.91-95	高温低湿となるフェーン現象発生による、小豆の花粉発芽への影響について検討した。強いフェーンの継続時間が花粉の発芽不良に影響することが確認された。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/agrmet/1943/14/3/14_3_91/_article/-char/ja
14	大橋善之, 明石直樹, 小森二葉, 松村篤, 大門弘幸, 2013, 剪葉処理した大納言アズキにおける処理時の生育量が収量・倒伏に及ぼす影響, 日本作物学会講演会要旨集, p.50	水田転換畑での小豆の収量や品質確保の検討を目的として、京都大納言を用い、複数の播種期の小豆に対し剪葉を行い、生育・収量等を調査した。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcsproc/236/0/236_50/_article/-char/ja/
15	沢口正利, 野村琥, 1980, 小豆品種の生育特性と窒素吸収の比較, 北海道立農業試験場集報, 43, p.1-11	北海道十勝試験場で複数の小豆種の生育特性と窒素吸収の推移を生育時期別に比較検討した。窒素を多く与えた場合、いずれも生長に作用するものの、品種により異なる作用が見られた。	https://www.hro.or.jp/list/agricultural/center/kankoubutsu/syuhou/43/43-1.pdf
16	松波寿典, 鄭健鎬, 大木行彦, 姫野祐子, 国分牧衛, 2016 : 土壌水分の低下がマメ科作物4種の生理生態に及ぼす影響, 日本作物学会東北支部会報(59) p.5-9	ダイズ、アズキ、ササゲ、及び落花生が土壌水分の低下により、光合成能、窒素固定能、及び生育の抑制程度について比較した。これらの比較から、それぞれの種の違いの要因について検討した。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/tjcs/59/0/59_5/_article/-char/ja/
17	中辻敏朗, 丹野久, 谷藤健, 梶山努, 松永浩, 三好智明, 佐藤仁, 寺見裕, 志賀弘行, 2011 : 地球温暖化が道内主要作物に及ぼす影響とその対応方向 (2030年代の予測) (1), 北農 78(4), p. 440-448	地球温暖化が北海道作物の生育や収益、品質等に及ぼす影響を2030年代を対象として予測した。特にここでは、飼料作物を対象としており、飼料用トウモロコシなど作物によっては気温上昇に伴い収量増が見込まれる結果となった。	-
18	佐藤仁, 2011 小豆 pp.55-63 ; 地球温暖化と生産構造の変化に対応できる北海道農林業の構築—気象変動が道内主要作物に及ぼす影響の予測—成果集, 志賀弘行, 中辻敏朗編	収量及び品質に対する気温の関係をを用いた生産量予測推定式を作成し、温暖化に伴う生育季節への影響を予測した。ここでは、2030年代の小豆生産量の予測を検討している。	https://www.hro.or.jp/list/agricultural/center/kankoubutsu/shiryu/39/fulltxtindex.html
19	長岡泰良, 沢田壮兵, 加藤清明, 2004, アズキ種皮色に対する登熟期温度の影響, 日本作物学会紀事, 73 (3) p. 330-335,	小豆の品質に重要な種皮色について、エリモショウズに対する登熟期の気温の影響を2つの実験により調査した。この結果、登熟期の気温が高い場合に、種皮色が濃くなりやすいことが示された。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcs/73/3/73_3_330/_article/-char/ja/
20	植木邦和, 井口厚信, 1967, 開花後の夜高温が小豆の登熟ならびに次代作物に及ぼす影響, 3, p.54-58	開花後の夜間高温がアズキの開花、結実、及び次世代作物の生育に及ぼす影響を調査した。結実については、高い夜温で、結実期間の短縮などの影響が見られている。	-

21	佐藤久泰, 1979, 小豆の開花・登熟について, 北海道農試集報, 41, p.10-20	凶作年である1966年及び豊作年である1967年に栽培された小豆により、北海道における小豆(宝小豆)の開花、登熟に及ぼす気温と栽植密度の影響について調査した。種子は気温の高い1967年より1966年で大粒となる傾向が見られた。	https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8891808_po_41-2.pdf?contentNo=1&alternativeNo=
22	長谷川雅義, 水沢誠一, 星野卓, 池主俊昭, 中村幸一, 1996, 高温登熟地帯における小豆の品質劣化要因について: 第1報栽培条件と品質変化, 北陸作物学会報, 31, p.30-32	ベニダイナゴンの品質劣化要因検討を目的とし、ベニダイナゴン及び佐渡在来-7の種皮色と気象要因の影響、及び登熟温度が生育収量及び種皮色へ及ぼす影響について調査した。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/hokurikuucs/31/0/31_KJ00002445127/_article/-char/ja/
23	義平大樹, 由田宏一, 中世古公男, 1988, アズキの倒伏と地上部形質との関係, 育種・作物学会北海道談話会報, 28, p.19	各小豆種の倒伏の基礎的知見を整理するため、地上部の形態及び形質と、倒伏の発生について、2圃場において9品種の小豆について調査した。この結果、倒伏の起こりやすさは根と地上部の大きさが関わることを示された。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/hdanwakai/28/0/28_19/_article/-char/ja
24	原田景次, 1953, 小豆の播種期と開花結実, 日本作物学会記事, 22(1-2), p.101-102	北海道の夏小豆の播種期と開花及び結実傾向の関係についてまとめた。この結果、開花の適温は20°Cから30°C、播種から開花までの積算気温が1000°C以上であることがわかった。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcs1927/22/1-2/22_1-2_101/_article/-char/ja
25	島田尚典, 千葉一美, 1993, 1993年に十勝地方で認められた低温による小豆の着莢・結実障害の解析, 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報, 34, p.34-35	北海道各地における1993年の小豆の大冷害についての解析を行った。6月から7月に低温及び低日照だったことに加え、遅れた着莢及び登熟が10月の強霜によって被害を受け減収に拍車をかけた。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/hdanwakai/34/0/34_34/_article/-char/ja
26	半田祐一, 藤本堯夫, 金森哲夫, 1986, 窒素栄養状態が小豆の生育と子実生産に及ぼす影響, 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報, 26, p.13	北海道のエリモショウズの成育と子実生産への窒素栄養の影響について調査した。窒素栄養の改善は、生育前期・後期に実施した場合、莢数、百粒重の増加に効果があることが示された。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/hdanwakai/26/0/26_13/_article/-char/ja
27	島田尚典, 村田吉平, 原正紀, 1987, 高温による小豆の花粉不稔・落花現象, 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報, 27, p.47	開花前に高温が続いた昭和51年及び58年は、小豆の落花が多く見られたことから、エリモショウズの落花に対する高温(36~40°C)の影響について調査した。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/hdanwakai/27/0/27_47/_article/-char/ja
28	堀尾拓之, 越後瞳, 2016, あずきの歴史と栄養, 名古屋経済大学自然科学研究会会誌, 49(1・2), p.21-34	小豆の基礎知識、栄養元素構成、及び品種の特徴についてまとめられている。本調査では、小豆全般の知見収集に用いた。	https://nue.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=142&item_no=1&page_id=32&block_id=39
29	赤井純, 1982: 北海道の水田転作における豆類の土壌病害と防除, 北日本病虫研報 33, p.1-6	主要な土壌伝染性病害である「アズキ落葉病」と「アズキ茎疫病」の発生経過と研究の現状について、特に当時増加していた水田転換畑での状況及び防除について、解説している。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/kitanihon1966/1982/33/1982_33_1/_article/-char/ja
30	藤田正平, 村田吉平, 松川勲, 1997, 1997年十勝地方における8月中旬の低温が小豆に与えた影響, 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報, 38, p.128-129	十勝地方における1997年8月中旬の低温がエリモショウズの開花及び着莢に与えた影響について検討した。同年は低温により着莢障害により、莢数が平年より低下し、減収となった。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/hdanwakai/38/0/38_128/_article/-char/ja